

33

築城典刑		
A J -37	万延元(1860)	Pell原著 大鳥圭介訳
縄武館から発行された築城技術書。オランダの兵学者ペルの著作を大鳥圭介が翻訳したもの。		

- ◆ 5巻、5冊からなる。原書はペル(C.M.H.Pell)の“Handleidin tot de Kennisder Versterkings-kunst,ten Dienst van Onderofficieren”(1852)（「下級士官の為の築城教範」）である。縄武館とは、江川太郎左衛門、高島四郎らが開設した洋式砲術の伝習所である。本書は、当時縄武館の教授であった大鳥圭介(1833-1911)が、江川太郎左衛門の命により翻訳したものである。内容は次のとおりである。

- 1 築堡法 2 野堡守衛・検地法 3 各地の地形及び物件を守衛する方法
- 4 永久築城法 5 城郭の攻守・野戦築堡・永久築城法

原書の翻訳は緒方塾において福沢諭吉らが争って試みたといわれたが、大鳥によって完訳されることになった。本書には四角、六角、八角の各面堡の図があることから、箱館や岩村田の五稜廓築城のテキストとなったものと思われる。

大鳥は、安政4年(1857)ごろから蘭書に記載されている活字鑄造法を参考にして、錫鉛・アンチモン合金による、漢字と片仮名の洋式金属活字を鑄造した。それを用いて印刷された最初の刊行物が本書である。

- ◆ 当館所蔵本は「諸術調所」「駿府学校」「新銭座演習所」の印記をもつ。「新銭座」は縄武館が置かれた地名である。

*マイクロフィルムあり。

34

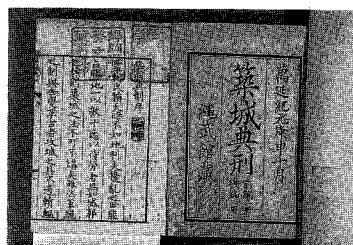
築城新法		
A J -38	文久元(1861)	Beckmon, Pell原著 広瀬元恭訳
オランダの築城技術書の翻訳書。初篇と第二篇からなり、それぞれ原書を異にする。時習堂発行。		

- ◆ 初篇の原書は、ベックモン(J.F.Beckmon)の“Handleiding bij het Onderrigt in de Verschansing kunst”(1856)、第二篇の原書は『築城典刑』と同じ、Pellの『下級士官の為の築城教範』であろうと思われる（凡例に「百兎（ペル）氏ノ一千八百五十年ニ著ス所ノ築城書ヲ抄訳シ」とある）。初篇の発行は安政6年(1859)である。

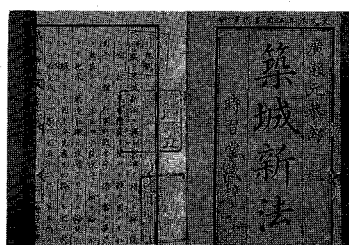
訳者の広瀬元恭(1821-1870)は幕末の蘭学者・蘭方医。その学識は医学・物理学・化学・地理・砲術・兵制・馬術と幅が広く、著書、訳書も多方面にわたっている。時習堂は、元恭が開いた蘭学塾の名称である。

- ◆ 当館書蔵本は初篇を欠き、第二篇（7巻、5冊）のみである。「諸術調所」「駿府学校」「静岡師範学校」「広瀬氏図書記」の印記をもつ。

<参考文献> 『大鳥圭介』(289.1-オ83) 『知られざる蘭医の夢 広瀬元恭の生涯』(913.6-1822) 『葵文庫所蔵本の紹介『築城典刑』』(『図書館だより』No.38 所収)(SZ01-100)



33 築城典刑



34 築城新法